

戦中の苦難越え続く交流

創立90周年「関西日仏学館」歩みたどるシンポ

文化

関西日仏学館の90周年を振り返ったシンポジウム
(京都市左京区、アンスティチュ・フランセ関西)



「京のフランス」として母国の語学や文化を伝えてきた京都市左京区の「関西日仏学館」(現アンスティチュ・フランセ関西)が10月で創立90周年を迎えた。記念して開かれたシンポジウムでは、フランス政府による語学学校として日本で初めて1927(昭和2)年に設立されて以来の歴史を関係者がたどった。京大人文科学研究所によって初めて行われた資料調査の成果や、戦時中に関係者が受けた苦難の記憶が掘り下げられた。(樺山聡)

シンポジウムでは、資料調査を担当した立木康介人文研准教授による概説を受け、関西日仏学館の元館長のミッシェル・ワッセルマン立命館大特任教授が「第2次世界大戦中の関西日仏学館」と題して講演。「駐日大使ポール・クロードルが京都での設立を提唱したのは世界でのドイツ文化の優位性に対抗する狙いだった」と指摘した。

独文化の優位性に対抗

戦時中の状況についてワッセルマン教授は、終戦直前に逮捕された教師のオーシユコルに70年代に会ったことがあると明かし、「『獄中で仲間が飢えて次々と亡くなる中、与えられた1個のおむすびを米1粒ずつゆっくり食べ生きてながらえた』と聞いた。こうした先人の精神の強さがあったの今だと知ってほしい」と述べた。

仏独の“深い溝” 「アルザス通り」

戦時中、隣接した関西日仏学館とドイツ文化研究所の間には敵対する本国同士の関係が影響し、「深い溝」があった。境界にある細い路地は当時、歴史的にドイツ領になったりフランス領になったりした地域になぞらえて「アルザス通り」と呼ばれたという。路地は今も残るが、ドイツ文化研は京大施設になっているため当時の面影はない。



戦時中、「アルザス通り」と呼ばれた路地。今は車も行き交う(左京区)

は「フランス側は隣のドイツ文化研より立派な建物を造ってみせると重厚な建築美を目指した」と、本国が対抗意識を強く持っていたことを示した。京大人文研の調査からも、本国の「文化発信基地」であった双方が火花を散らしていた様子が浮き彫りになった。

ゾラのサイン入り著書など展示 12日まで

アンスティチュ・フランセ関西では、関西日仏学館の90周年を振り返る展示も行われている。戦後の1952年ごろに中国・上海のフランス機関から同館に送られたとみられる図書約4千冊の一部が公開されている。作家ゾラが友人に贈ったサイン入りの著書「パスカル博士」も展示されている。



開かれ、手に取って見ることが出来る。展示図書は、フランスの作家エミール・ゾラが友人に贈った手書きのサイン入りの著書「パスカル博士」など、上海アリアンス・フランセーズの図書館から送られた貴重な本が並ぶ。今回の展示に合わせて初めて詳細に調べられたという。ジャン・ミシエール・ギヨン事務局長は「中国の内戦やその後の混乱を免れたためだったとみられる」と話す。

隣接したドイツ文化研に戦時中、ナチスの旗が掲げられた様子を写真で伝える当時の新聞記事や、九条山時代の写真も展示されている。12日まで。入場無料。